

一九五五年（昭和三十年）、戦後の経済復興期を過ぎ、「もはや戦後ではない」と高度経済成長期への突入を宣言するこの年、菊池順子は、父坂口純一、母洋子の間に、二男一女の長女として、東京都葛飾区で産声を上げました。

この年は、ロカビリーブームの影響で「ポニーテール」が、またマンボブームの影響で「マンボスタイル」が若者の間で流行しました。

順子が物心ついた頃、日本は高度経済成長期へと向かいます。大阪万博に象徴される平和と豊かさの時代に、東京技術大学で学び、青春期を謳歌しました。

やがて全国に交通網が敷かれてゆき、社会は繁栄を続けていきます。日本が国際的にも責任を持ち始める中で、順子は、何を見つめていたのでしょうか。順子は、芸術家として、確かな足跡を記して、一歩ずつ歩んでいきました。

「母の展覧会に、小学生だった私の作品を飾ってくれたのが、一番の思い出です。以来、私も芸術の道に足を入れましたが、少しづつ母に近づけるようになりたいと思います」

ふり返れば一九七九年（昭和五十四年）、順子は、愛しき伴侶陽一と結ばれます。

移りゆく季節には、雄一、美和、敏文という子宝に恵まれ、温かな家庭を築き上げていき

ました。

親としての喜びと責任を感じながら、子供たちの成長を静かに見守ってきました。あたたかな生活の中、幸せな時間に包まれました。

「母が京都が好きで、よく一緒に寺参りをしました。天橋立を展望台から見たときに、『海に筆で橋を描いたようね』と言って笑っていたのを思い出します」

世界が始まった時から、季節は常に巡り、人は時の流れに生きてきました。そして限りある命は、生れ落ちたその時より、抗えぬ時の流れに立たされています。順子は、誰にも惜しまれながら、最期の時を迎えました。たくさんの思い出を残し、精一杯生き抜いた素晴らしい人生でした。

「最期まで、次の作品のことを考えながら、前向きに病氣と闘ってまいりました。治療中にもスケッチブックを片手に構図を整えたりして、常にプロとしての自覚を持ち続けました」

和やかなその笑顔。

順子の暖かなぬくもりは、風にのって、いつまでも空から降り注ぐことでしょう。

菊池順子 六十一歳

二〇十六年（平成二十八年）一月十八日

永眠